

# ラボの世界

THE WORLD OF LABO

## TOPIC

さまざまな  
かたちの  
国際交流  
P.4-5

- 01 10代とともに「あなたも世界をよりよくするひとり」
- 04 さまざまなかたちの国際交流
- 06 本多豊國氏「墨絵の国から世界をみる」
- 07 世界へ！カナダのラボ高校留学カウンセラー
- 08 Hello ラボ・インターン～北米第34期
- 09 東京言語研究所 集中講義「外から見る中国語、内から見る中国語」
- 10 Go Ahead! 心のつかい方



どんなときも  
世界はつながっている



# 10代と ともに

## あなたも世界をよりよくするひとり。 できることが、きっとある

辰野まどか氏は、世界をよりよくしていこうという志をもつ仲間を世界中につくる活動を続けています。そのきっかけは、17歳のときの衝撃的な体験によるとのこと。未来をつくるのは自分たちなのだ、勇気をもらおうお話でした。(オンラインでインタビュー)



### Tatsuno Madoka 辰野 まどか

神戸市生まれ。一般社団法人一般社団法人グローバル教育推進プロジェクト(GiFT)のファウンダー・代表理事。東洋大学客員教授(食環境科学研究科)。米国大学院にて、異文化サービス・リーダーシップ・マネジメント修士号取得後、米国教育NPOにおいてグローバル教育コーディネーター、内閣府主催「世界青年の船」事業コース・ディスカッション主任等を通して、世界各地で多国籍チームとグローバル教育を実践。2012年末に(一社)GiFTを設立し、世界をよりよくする志であるグローバル・シチズンシップ育成推進のための活動を開始。中学・高校・大学・企業を対象としたグローバル・シチズンシップ育成に関するプロデュース、研修、講演等を行なう。

—お仕事について教えてください。

#### 「SDGsを実現するために 同志を育てています」

私は、GiFTという団体を立ちあげ、教育の現場で、世界をよくするための、グローバル・シチズンシップ教育に取り組んでいます。グローバル・シチズンシップとは、世界をよくする志のこと。これは、だれもがもっている「世界をよくしたい!」という思いのこと。それを育てていく仕事なんです。

具体的な活動としては、シンガポールをふくむ7か国で、SDGs(エスディーゼズ)をテーマにしたプログラムの実施や、高校、大学、企業の方、先生への研修などがあります。SDGsとは、“Sustainable Development Goals(持続可能な開発目標)”の略称です。これは、2015年9月に国連で「2030年までにこんな世界にしよう」と設けられた17個のゴールのこと。国連は2020年現在193か国が参加していますが、そのすべての国が賛成したとともめざらしいゴールです。具体的には〈貧困をなくそう〉〈飢餓をゼロ〉〈すべての人に健康と福祉を〉〈質の高い教育をみんなに〉〈ジェンダー平等を実現しよう〉など。地球にやさしいものをつくることや、平和をつくること、それらにみんなで取りくむことなども掲げられています。

SDGsについては、そろそろ学校でも学ぶようになります。日本では、みなさんの世代がいちばん知っている率が高くなるでしょう。世界でも、10代の人たちが環境問題、教育問題をどうにかしようと動き始めています。「おとなたちは、このような問題から逃げられますよね。でも私たちはまだまだ未来を生きていかなければならない。だから変えていきましょう」と、このように10代がリーダーになってメッセージを発していることも、SDGsの特徴です。

貧困問題、環境問題と聞くとむずかしいと思うかもしれませんが、でも、みなさんがラボにいて世界につながろうとしていることも、世界をよくしようという志。これから海外に行こう、これから学ぼうとしていくことも未来をよくする

ことだと思います。私は、みなさんのような仲間と出会いながら、よりよい世界を教育を通してつくっていこうとしています。うれしいことに、私たちの活動に、たくさんの人たちが世界各地で参加してくれています。

—プログラムや研修の中身を教えてください。

#### 「留学などを控えた人に その志をたかめる研修を実施」

文部科学省が、世界中どこでも留学費用のサポートを受けて留学できるプログラム「トビタテ!留学JAPAN」を提供しています。スポーツやテクノロジーなど、さまざまな目的で留学したい人が、世界100か国くらいに留学しているのですよ。私が創設したGiFTでは、そのプログラムの高校生参加者全員に研修し、「なぜ自分が世界とつながりたいのか」「どんな志をもちたいのか」といったことを考えてもらいます。いちばんたいせつなのは自分を知ること。自分がいったいなににワクワク、ドキドキ、モヤモヤしているのか。目の前の仲間がどんな思いなのか。そんなことを考えるステップをへて、自分と仲間が新たな価値観をもって社会に還元できるように背中を押しています。

私たちのような活動は、じつは世界中で行なわれています。SDGsの実現にむけて、さまざまな問題を解決するために、いろいろな国が協力して知識をひろめようとしているんです。私たちもそういう場で国際協力しています。2019年は約100カ国が参加するベトナムでの会議に参加し、学びあう機会を持ちました。国内では、さまざまな機関と協力しながら、学校のなかで世界をよくする志を育てる場を増やそうとしています。人気芸人の方と高校生たちがSDGsを広める活動をごいっしょしたこともありました。

—世界に目をむけたきっかけは?

#### 「17歳の誕生日プレゼントが 国際会議への参加権でした」

私の生まれは神戸なのですが、5歳で東



京へ。小学校5年生のときに都内でも引越しをし、転校しました。それまでは、先生になりたかったこともあり、勉強でもなんでも“はりきりガール”でした。でも、転校後はぜんぜん文化が違ったので、静かに過ごすようになってしまいました。母親がいまでも当時をふり返って言うのが、「みんなと同じがいい」と私がいつていたこと。まわりを見ながら、みんなと同じでいることにすごく気をつかう子に変わってしまいました。

中学校は、私立校に入学したのですが、じつはそこが帰国子女がたくさんいる学校だと、あとで気づきました。みんな、英語の発音がとてもきれいで、先生にもまちがいを指摘するぐらいのハイレベル。どうやってもその子たちに勝てないと思ったのと、日本人は日本語をしゃべっていればいいと思い、反抗期も相まって英語をいっさい勉強しませんでした。当然、英語の成績は悪く、追試を受けながらも、放棄していました。

ところが、17歳のときに大きな転機がありました。6月の誕生日の朝に、母がものすごいテンションで、「誕生日おめでとう! すごいプレゼントを用意した」といつてきたのです。

17歳というのは、母親としてはすごく特別な年齢と思っていたようです。そして、「来月からの夏休みに3週間、スイスの国際会議に参加する権利をプレゼントします!」といわれました。そのとき高校生だった私の気持ちを率直にいうと、「なにいつてんのこのお母さん。来月というのもむりだし、3週間という長さも、ひとりというのも完全な“無理ゲー”。なによりスイスの国際会議に参加する権利ってなんなんだ? むりむり! 英語できないし、おとなの会議に参加できるわけじゃない!」ということでした。

母はボランティア枠で申し込んだようでした。あっけにとられている私に、「世界の政治家やNGOのリーダーが集まるけれど、ぜったいだれかが子どもを連れてくるはずだから、あなたはだれかの子どものふりをして参加してくれればいい」と強引に説得されて、しぶしぶひとりでスイスまで行くことになったのです。

## —国際会議はいかがでしたか?

### 「私の感想に、おばあさんが激怒。衝撃的で、ターニングポイントに」

会場は山の上にあるお城でした。世界のあちこちにアニメ映画『白雪姫』のお城のモデルと噂されるものがあるのですが、そのひとつだったようです。入口から入った途端、アフリカ、アジア、ヨーロッパ、オセアニアなど、さまざまな国からの参加者がいて圧倒されました。そんなところに突然子どもが入ってきたのですから、いろいろな人が話しかけてきました。とっさに“I can not speak English!”と叫んだら、「おお! じゃあ、あなたはフランス語がしゃべれるのね」といつせいにフランス語で話しかけられ、泣きそうになりました(笑)。

会議では、世界のさまざまな問題について、300人ぐらいの人が毎日毎日話しかけていました。私は英語がわからないから、一生懸命辞書をひきながら、貧困のことを話しかけていたらしい……など、なんとなくの内容をつかみ、いろいろな国の人たちが話しかう姿を見ていました。ちょうど第二次世界大戦の戦後50周年の会議でもあったので、日本人が責められる場面もたくさんありましたが、「でも、こういうことを二度と起こさないように、おとなたちが話しかけている。ほんとうにおとなってすごい。こうやって世界は平和になってきたんだ」と実感でき、毎日心が揺さぶられていました。

私はボランティアとして3週間ずっと会場にいたので、最終日に「せっかくだから感想を発表してください」といわれました。英語ができないのでどうしようかと思いましたが、なんとか友人の助けをかりて、15人ぐらいの小さなグループの前ではあったけれど発表しました。「世界の人たちが平和になるために話しかけている場がほんとうにすばらしい、こういう場がこれからもずっと続いてほしい」と。17歳の私が、そのときにほんとうに心の底から思ったことでした。われながらよいことをいったと思って席についたら、目の前に座っていたかなりご高齢のおばあさんが、ブルブルと震えだしたんです。そして、「なにいつてんの!」と大きな声で怒鳴

られました。「こういう場が続いてほしいじゃなくて、あなたが続けていくんでしょ!」と。

これが私にとってとても大きな人生のターニングポイントでした。それまではだれかが平和をつくってくれた、おとながやってくれたと思っていました。そうか、だれかがつくってきたんだとしたら私もそれをつくる側に立たなければならないと気づかされたのです。ちなみにあとで知ったのですが、このおばあさんは相馬雪香さんという、戦後に日本ではじめてのNGO、「難民を助ける会」を立ちあげた方でした。その後、彼女の後を追って日本にはさまざまなNGOが結成されました。彼女の生きざまは私のロールモデル(お手本になる人)となり、少なからぬ影響を受けていると思います。

国際会議から戻ってきた私は、教育にずっと興味があったので、教育を通して平和をつくる仲間をつくろう、ちゃんと平和をつくりつづける自分でありたいと、心に火がつかしました。熱くなりすぎて、高校3年生のときには、大学生のボランティアに参加するようになっていました。活動を通じて気づいたのは、世界のことを知らないのはもちろん、日本のことも知らなすぎてなにもいえないということ。そこで、大学では1年のときには日本を知り、2年では世界を知り、3年で社会を知って、4年で自分を見つめなおして就職する。そんな目標を立てました。

実際、1年のときには環境活動や国際交流などの場にたくさん顔を出し、全国各地の思いのある大学生たちにたくさん出会いました。いろいろな活動に取りくむ同世代の先輩や友人から話を聞くうちに、自分は教育や国際協力などに胸が熱くなると発見。自分のやりたいことに気づきました。そこで大学2年からは、ただ海外に行くのではなく、国際協力やグローバル教育を実現するために行く、と目標を定めました。国際教育団体のプログラムで70都市でボランティア活動、ミュージカル、ホームステイを経験。内閣府主催の「東南アジア青年の船」事業にも参加し、東南アジア10か国との国際交流活動をしました。このほか、自分でプログラムをつくって、仲間とア

# 10代と ともに



辰野さんは、「妄想」というすてきなことをプレゼントしてくださいました



フリカに行ったり、中国やヨーロッパを横断したりしながら、世界を知っていきました。

大学卒業後、企業勤務をへて、海外の大学院に留学。約50か国の仲間と、グローバル教育について学びました。そのあとアメリカで就職し、さまざまな国の仲間とグローバル教育の仕事に取り組みました。

そして大好きな仲間たちと2012年にGIFTを立ちあげ、いまに至っています。いまなおこの活動を続けていられる理由は、自分のまわりによい友人がいたからだと思います。海外に目覚めたばかりの私は、英語も話せず、世界も知らず、なにもできない状況でした。でも、夢があり、行動力がある友人たちとの出会いが世界を広げてくれました。彼らがんばろうとしていたから、自分もがんばろうと思え、彼らが応援してくれたからGIFTを立ちあげられました。決してひとりでは夢を叶えてきたわけではなく、同じ夢や思いをもった仲間がいたからこそ、あきらめずにこういった活動ができていたのだと思っています。みなさんもすぐ隣に、同じように世界とつながりたいと思っているラボの仲間がいます。ぜひたいせつにしてください。

—10代の若者にメッセージを。

**「最高の自分と世界を妄想しよう。  
それが未来をつくるから」**

SDGsは2030年の世界。10代のみなさんはちょうど社会人になるぐらいの年です。そのときに、自分がとても生きいきしているとしたら、どんなことをやっているのか。どんな人

たちがまわりについて、どんなところに住んでいて、たとえばどんな一日を過ごしているか、そんなことを妄想してほしいんです。ほんとうに自分が思っていることは、けっこう実現してしまうもの。だから、だれにも見せなくていいから、その妄想を紙に書いて、たいせつにしておくことをオススメします。

私からのメッセージというのは、その妄想が私たちの未来をつくるということ。国と国とが憎みあって戦争していた時代から、こうやって日本の私たちはいろいろな国と信頼関係を築いていろいろな国の人と交流できる時代を生きています。それはだれかが実現しようと妄想し続けてきたからです。心の底にある、そんな熱い思いが、私たちの未来をつくっていくんです。妄想して書いたような、書けたような世界をつくる力が、みなさんにはあるし、それが世界をもっとワクワクしてすてきなものにしていけると信じています。

こういった場所で話させていただくのは、世界をよりよくする仲間に出会いたいからです。世界をよくするといっても、「すごいこと」でなくてもいい、あなたに「できること」があると思います。たとえば、ホームステイで、ホストとなかよくすることだって、世界をよくすることのひとつだと思います。今日は、10代の頃から世界とつながっているラボのメンバーと過ごすことができ、ほんとうにうれしかったです。

みなさんも世界をよりよくしていくひとり。これからいろいろなかたちで出会うことがあると思うので、いっしょにがんばりましょう。

(文責 編集部)

## インタビューを 終えて

[取材協力]  
山本由起P(島根県)

違う国の人たちとなかよくするためにどうしたらいいかと質問したら、日本の写真や得意なことを見せるといいし、「この人」と決めて話すといい、と聞いた。辰野さんみたいなすごい人になりたい(齋藤こまち/中1) ●これまで世界や社会問題について考えたことはなかったけど、自分たちのような中高生でも世界に影響を与えたり未来を変えたりすることができるのかなと思った。辰野さんの、急にいわれてスイスの国際会議に参加するという勇気や行動に驚いた。自分も来年の国際交流までに、そういう気持

ちをつけて、悔いのないよう行動したい(山本朱莉/中1) ●辰野さんは、一つひとつのことにチャレンジしてやりきってすごいと思いました。17歳でのスイスの国際会議の経験や大学時代に外国に行った経験などが人生に多くの影響を与えていることがすごくわかった。ラボではそういう体験を中1でできることはすごい。チャレンジした先になにかが待っていると信じてこれからチャレンジしつづけた(古和輝宙/中1) ●17歳でスイスの国際会議になにもわからないのに飛びこんですごい。そこから世界を変えるような仕事につきたいと考えたのもすごい。私もラボに入ってそのチャンスもらったからにはまずは日本のことを知って世界を見てきたい(押越紀良星/中2) ●社会はおとなだけが考えるものだと思っていたけど、子どもでもできることがある

のだと知った(小野美遥/中2) ●「自分で考えて行動しよう」「自分にできることを考えてみよう」「外国に行きたい」「これから『妄想』してみよう」「自分のやりたいことはやってみよう」と思った(榎原雅朗/中3) ●辰野さんは自分の思ったことを行動にうつしてすごい。行動に移すことで自分の思いや新しいことを発見できるとわかった。私はだれかがしてくれると考えることが多かったと思うけど、今日の話で、自分のこととしてやらなきゃいけないことがみえてくると思った(古和雪菜/中3) ●自分と同じ年齢でスイスの国際会議に出ていて英語をまったく話せないのにその話についていったなんてすごい。「妄想」をいま考えてみて、といわれて少し悩んだけど、10年後に社会に出て自分から考えて行動し、いつか世界の差別問題とかに貢献したいと

思った(小野礼慈/高2) ●大学生になっておとなの話聞く機会が増えたけど、今日のお話には大きな刺激を受けた。大学時代の1年、2年、3年、4年……と、学年ごとに自分の目標を立てたことなど、いまから取り入れたいと思った。自分の夢に少しでも近づけるようがんばりたい(湯浅紳矢/大1) ●ぼくは、中学生で国際交流に行ってから将来は海外に関わることをしたいなと思っていた。でもそれは漠然としていて、いまなにをすればいいかわからなかった。辰野さんの話で、とくに大学生時代に行動されていたことを聞いて、貴重な大学生時代をぼっっとして過ごすのはもったいないと思った。興味のあることに飛びこむ勇気をもとうと思う(山本航大/大1)

[取材日]2020年10月

# さまざまなかたちの国際交流

今年は「海をこえて」の国際交流はなかなかできませんが、それでも「人の交流」はつづいています。日本にいる外国の方との交流、オンラインで海をこえての交流のようすをご紹介します。

## 国内でもできる国際交流

富永淳子（佐賀県）

ラボ・インターナショナル・ボランティア・リーダー

私たちは数年前から佐賀県国際交流協会のご支援で中国・韓国・ベトナム・フィリピン・スリランカなど、いろいろな国の方からお話を聞く国際理解講座を毎夏、開催してきました。コロナ禍で国際交流などの行事が中止となりましたが、今年はソーシャルディスタンス・消毒・マスク着用で感染予防を徹底しながら、チュニジアからの留学生に話していただきました。

北アフリカの地中海側のチュニジアで生まれ育った彼は、その地理や文化についてプロジェクターでわかりやすく説明してくれました。同じくらいの暑さになるけれど湿度が違うので、日本のほうがむし暑いことや幼児期からアラビア語・英語・フランス語、と3か国語を学ぶこと、彼らはミントティーに砂糖を混ぜて飲むので、はじめて日本でお茶を飲んだときはびっくりしたが、いまでは日本のお茶のほうが好きとのことでした。

チュニジアでは日本のアニメが放映され、いちばん人気は「ちびまる子ちゃん」で、まる子ちゃんの名前も違う、など興味深く聞きました。

子どもたちにとって、世界に目をむけるととてもいい機会になっているので、これからもできることを探していきたいと思っています。

当日は地元のテレビ局や新聞の取材があり、9月3日に新聞掲載されました。

<感想文>

\*夢を実現しようとされている姿がカッコいい。日本語をじょうずに話すラミーさんの「失敗を恐れない」というのを聞いて、「そうか！ そうだ！ 外国に出る（行く）ってすごい！ 行こう!!」と思った。

\*はじめて知ったことがほとんど。本物の民族衣装を見ることもできずぐいい経験ができました。チュニジアの伝統料理（クスクス）を食べてみたいと思いました。世界の国のことや宗教のことなどをもっと知りたいと思うきっかけになりました。

\*チュニジアの国のことばもいくつか教えていただいて、ほかの国のことばにも興味もてた。建築の仕事を目指していると聞いて、国を超えて夢を叶えるのはたいへんなのに、すてきだと感じました。



## オンラインで広がる国際交流

長井朋江（東京都）

ラボ・インターナショナル・ボランティア・リーダー

私たちは毎年、日本に来ている留学生を招いて小5以上の子どもたちとの交流会を開いてきました。留学生のみなさんにとってはほんとうの日本を知るチャンスですし、日本の子どもたちにとっても北米、東南アジアなどからの留学生の方々と交流していい刺激となります。

ですが今年はコロナ禍で、例年交流している日本語学校などにはあまり留学生が来ていないし、会場も使えないのでむり、とあきらめていたところ、ボランティア・リーダー仲間が「リモートならいいのでは？」とひとこと。いつも交流を

している日本語学校に声をかけると3名の留学生（アゼルバイジャン2名、ベトナム1名）が参加してくれることになりましたが、日本の子の参加希望は実行委員もいれて約40名。もう少し海外の方が……と思っていたところ、ボランティア・リーダー仲間が、過去にホームステイ受入れをしたラボ・インターン（現カナダ在住）や、元留学生でいまは日本で働いている韓国の方、アメリカ在住の親戚の方（夫がアメリカ人で妻が日本人）などに声をかけ、当日は日本在住の留学生と、アメリカ、カナダからの参加者もふくめ、計7名の海外

の方がオンラインで参加してくれました。

参加した日本の子7人と留学生または海外の方ひとり、という小グループに分かれ、国のこと、ご自身のことについてクイズ形式で教えてもらったり、子どもの頃にした遊びなどを教えてもらいました。

こちらからも日本文化を伝えようと、かんたんに折れるダルマさんをその場で折り、それが海外の方へのおみやげとなりました。フリートークでは、「国による大学制度の違い」なども話題にのぼりました。

プログラムの組立てからクイズ、ゲームの企画、司会などはすべて高校生、大学生の実行委員たちがしました。準備会もすべてリモートで行ないました。

留学生の方がたからは、子どもたちとの交流が刺激になったようで、「とても楽しかった」「折り紙でダルマを作ったのがおもしろかった」との感想がありました。

日本の子の感想は、「留学生の方々がみんな明るく笑顔で

接して下さったので、最初は緊張したけど、最後には笑っていた」「テレビニュースでアゼルバイジャンのことを聞いていたので耳を傾けて聞いた」「身近に国際交流ができてうれしかった」などでした。

コロナ禍で対面型ではできませんでしたが、オンラインで楽しくでき、海外からの参加も可能なんだ！と、新たな交流会の道も見えてきた気がしました。



## 韓国とオンラインで国際交流

合田サワ子（京都府）

ラボ・インターナショナル・ボランティア・リーダー

ラボの韓国交流で私のラボ・パーティの子どもたちを韓国に送りだすだけでなく、私もはじめて韓国の地を踏み、とてもよい出会いと交流を体験したことから、その後に韓国からのホームステイ受入れ、そしてプライベートの交流に広がり、家族ぐるみで行き交うことになりました。

コロナウイルスの影響は韓国ラボでも同様で、活動する会場が使えずに支障があり、困っているということでした。そして「オンラインで活動しているから、日本の子どもたちともオンライン上で交流したい」と申し出がありました。

たしかにおもしろい提案で、興味はあったのですが、私自身がパソコンをうまく使いこなせず不安でした。でもしんせつに教えてもらい、つなぐことになりました。韓国側は10ファミリー、こちらは希望した4ファミリーでオンライン交流をすることになりました。



まず、指導者が互いにあいさつをし、子どもたちがひとりずつ、日本語、韓国語、英語、それぞれが使えることばで自己紹介をしました。

そして、『はらぺこあおむし』を、月曜日から土曜日までの部分をこちらが英語、韓国語、あちらが日本語で楽しみました。その後、ひとりずつナーサリ・ライムの発表、K-POPダンスの披露、韓国のSADAのダンスと、あっといふ間の時間でした。日韓両方の参加家族ともにとても楽しみ、今後も機会をつくってほしい、という感想でした。

後日、今年、韓国交流参加を希望していた小5女子の手づくり絵本と、韓国語、日本語の素がたりのDVDを韓国に送り、いまは韓国のみんで見て日本語の勉強をしているそうです。このオンラインでの交流を機に、ほかの日本のラボの指導者も刺激を受けて、韓国との交流をされたそうです。



## 墨絵画家・本多豊國の

# 墨絵の国から世界をみる



本多豊國（ほんだ・とよくに）

墨絵画家，絵本作家。作風は版画，墨絵，色彩画，それらを融合した「墨彩画」を特徴とする。1987年，イタリア・ボローニャ国際絵本原画展で『こぶとり』が入選。以後，ヨーロッパで絵本原画の賞を数多く受賞。アメリカでは特別展が催されるなど，海外でも評価が高い。

公益財団法人ラボ国際交流センターの評議員でもある墨絵画家の本多豊國氏。  
今回はネイティブ・アメリカンの人々との交流のようすについて寄稿いただきました。

### 動物が神で大地はみんなの家

ワシントン州。海のもとにカナダの島が見える。「あれもマカだ」と彼はいった。「太陽や月を空にのぼらせたり，食べ物や魚をもたらず超自然の力をもつ怪鳥レイブン（RAVEN）は，自由自在に姿を変える。海にとびこめばシャチになる」。

海辺のマカ族のレストランでマカ族カウンセルのみなさんと食事をしたり，おしゃべりを楽しんだ。マカのアーティストとぼくはその場で描いた絵を交換した。ぼくたちの絵はともよく似ていて，根源が同じだと感じた。



左のサケとまん中の下のはぼくの絵，まん中の上と右は彼の絵

### アリゾナの赤い砂漠にも生命がある

ジリジリと空気が焼けて，青い空に白い雲。完全無音の赤い砂漠に座りこんでスケッチ。描きはじめてから長い時間が過ぎた。なにもないと思っていたこの砂漠にだんだん生命の気配が漂ってきた。トカゲや小動物が走り，虫が穴から出てくる。ワシが空高く舞っている。スクールバスが来て，子どもがふたり降りた。



子どもたちは陽炎みたいにゆれて砂漠のなかへ消えていった。「この大地はみんなの家。ヒトもトカゲも草もファミリーさ」。ナバホ族のアンソニーの声がする。ぼくは暑さでぼんやりとしながら岩山を描いている。ささやくように風が吹く。

### おまえは風を知っているか？

アリゾナ州ピーチスプリングスは Route 66 にある乾いた小さい町。ネイティブ・アメリカンのスーパーマーケット。テーブル4卓の食堂。夫婦がハンバーガーを食べている。ぼくたちも同じハンバーガーを注文。目が合うと笑いあった。

外に出ると強い日差し。ベンチにおじさんがふたり。「どこから来た」「トーキョー」「そうか，ロサンゼルスのか？」「ノー，オーバースー」ありきたりな話。「おまえは，風を知っているか？」「もちろん」「もし食べることができなくても1週間は生きられるかもしれない。もし水がなくても3，4日は耐えられるかもな。しかし息（風）ができなかったら何分？」「食事水もお金が必要だろ？でもこんなにたいせつな風（空気）はどこにでもあって，しかもタダだ」。ぼくは深く風を吸った。揺れる柳。

ネイティブ・アメリカンには守護動物がいるそうで，ぼくのそれは旅のお守り「山猫」。ぼくは旅（人生）を続けている。



※ネイティブ・アメリカンは写真が苦手な方もいるため，顔は本多氏によるイラストです

# 世界へ!!

## ラボ・カウンセラーより ③

### ラボ高校留学プログラム **カナダ**

住み慣れた日本からひとりで未知の世界に入って、貴重な体験ができるカナダ。今回も、前回に続いて、あるラボ高校留学生の事例を紹介します。

#### 📍 何のためにカナダ留学？ 自問する留学生

カナダに到着し、最初の数か月は毎日の生活で精一杯。しばらく余裕はありませんが、半年も経つと、日常生活に慣れて、自分は「なにををしに留学に来たのか」と自問します。

#### 📍 日本をふり返る

そして、そのときに「カナダでなにか自分にできることは？」と考えます。日本文化、歴史、政治、気候などをよく質問されたことから、日本を共有する絶好の機会だと、みずから日本についてのプレゼンテーションを計画し、学校で発表。貴重な経験ができ、日本人として誇りを感じ、学校の先生や友だちからの評価を受けることで自信がつきます。

#### 📍 初心に戻ること

自分の大好きなダンスをカナダで挑戦したいと考え、参加したダンス部。実際にはダンスよりも部員の友人関係に悩まされ、何度も諦めてやめようかと迷った日々。そんなとき、再び「なにををしに来たか」と、初心に戻ること、最後まで諦めずにダンスを続けた彼女。達成感に満たされたことは忘れられません。

ブリティッシュ・コロンビア州 田邊向日葵さん



#### 重信陽子

しげのぶ・ようこ

大学時代にアメリカに留学。  
カナダで就職し、結婚、永住。  
2003年よりラボ・カウンセラー



重信さんはカナダでラボ高校留学を支援するラボ・カウンセラー。アメリカへの留学経験など、実体験にもとづいた親身なアドバイスは毎年多くの留学生を励ましています。高校留学生たちはカナダでどのように成長していくのでしょうか。重信さんのレポート3回目です。

#### 📍 自信が解決策を導く

カナダの基本姿勢は「移民を受け入れる」。とくに難民



の受け入れは世界の1/3です。カナダの首相も「多様性は私たちの力だ」といい、その移民政策は「寛容政策」ともいわれます。もちろん、カナダ政府としても移民

が経済を豊かにしてくれるという期待もありますが、「あるがままの受け入れ」といえるのではないかと思います。

ですからカナダでは、日本人としてのアイデンティティを再確認する機会が与えられ、日本人として誇りをもち、そこに新たな自信が生まれる環境があります。困難に直面したときに、自信がもてることで問題を解決する能力が養われます。



ブリティッシュ・コロンビア州 木下絢視さん(左)  
～日本文化のプレゼンテーション～

このように多種多様な国際感覚を養いながら、自己自立につながる貴重な経験をし、将来への前準備ともなるのがカナダ留学の特徴といえると思います。



# Hello! ラボ・インターン



## Incoming Interns

紹介します！ 北米 第34期ラボ・インターン

### ジョージ・アルバナス George Arbanas

アメリカ・ミズーリ州出身の22歳  
1月から4か月間、東京支部に配属予定



#### ニューヨーク州、ミシガン州、ミズーリ州と…

ニューヨーク州で生まれて、(手みたいなかたちの)ミシガン州、そしてミズーリ州に住んで、それからミネソタ州の大学に通っていました。いま家族はミズーリ州のセントルイスにいます。

#### 日本について勉強しました

大学では、日本語と日本文化を勉強しました。そして日本には3回来ました。今回は日本に長くいられるのでとっても楽しみです！

#### 音楽が大好き！

趣味はたくさんあって、「趣味は？」と聞かれるといつも困ります。でも、まず音楽が大好きで、いつも新しい曲とサウンドを探しています。時間があるときは、DJをして自分の音楽をつくるのも好きです。日本ではカラオケにも行きたいです。

それから、料理もするし、ゲームもするし、読書も好きです。みなさんに会うことを楽しみにしています！

### リリー・ハニック Lilli Hanik

アメリカ・ケンタッキー州の21歳  
1月から4か月間、東北支部と北関東信越支部に配属予定



#### ソーラン節を教えています

いま大学で日本語と国際関係について勉強しています。日本語クラブとフェンシングのクラブにも所属しています。そして「ソーラン節」を教えています。将来は外交の仕事をしたいと思っています。

#### 趣味はフェンシングとかいろいろ…

私は文章を書くのも読むのも、それからフェンシングは4年間やっていて、うたうことも好きです。

#### 食べるのだ～いすき

チョコレートが好きで、いなり寿司やラーメン、味噌汁も好きです。抹茶も大好きになりました。日本ではいろいろな食べ物に挑戦したいし、私もアメリカの食べ物をいろいろ作ってあげたいです。

#### ラボっ子の受入れは10年してきました

わが家では、10年にわたってラボっ子の受入れをしてきました。いろいろな出会いがあって、私の人生に大きな影響を与えました。今回も日本でたくさんの出会いをしたいです。

東京言語研究所・理論言語学講座では言語学に関するさまざまな授業が開講されています。今回は、集中講義をご紹介します。

集中講義（2020年11月14-15日）

## 「外から見る中国語，内から見る中国語 ——中国語・歴史探訪と文法散（三）策」



木村英樹（東京大学名誉教授）

### 時間を表わす中国語（時間詞）について

空間を表すことば（空間語彙）を用いて時間を表現する事例は世界の多くの言語において観察されます。日本語で空間を表すことば（空間詞）の「まえ」（「まえに進む」）や「あと」（「人のあとをつける」）が「まえにどこかで会いましたね」や「あとでゆっくり話しましょう」のように用いられるのもそうした事例のひとつです。同様の現象は中国語でも観察されます。

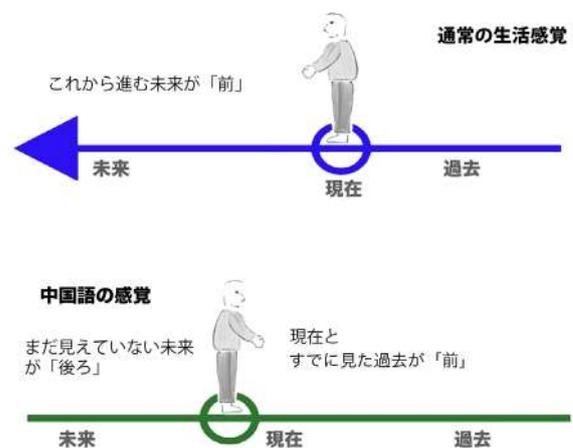
### 過去が〈まえ〉，未来が〈後ろ〉

「いま、あす、去年」のように、できごとの起こる時点、話し手の発話する現在を基準にして表わす語類を「直視的時間詞」といいます。中国語の直視的時間詞はその大半が空間語彙を用いて構成されており、すぐれて空間的だといえます。なかでもとくに興味ぶかいは、〈まえ〉を表わす“前”が“目前”（いま），“前天”（おととい），“前年”（おとし）のように、もっぱら現在および過去に用いられ、逆に〈後ろ〉を表わす“后”が“后天”（あさって），“大后天”（しあさって），“后年”（再来年）のように、もっぱら未来に用いられるという事実です。人は過去から現在にたどり着き、現在から未来にむかって歩んでいるという通常の生活感覚からすれば、過去は〈後ろ〉で、未来は〈まえ〉と捉えられてよさそうなものですが、中国語ではなぜか現在と過去が〈まえ〉、未来が〈後ろ〉と表現されます。なぜなのでしょう？

### 「見える領域」と「見えない領域」

中国語ではどうやら、現在および過去という既知の時間領域は「見える領域」、未来という未知の時間領域は「見えない領域」と捉えられているようです。現在自分が直面しているできごとはまさに目の前のできごとであり、その意味において「見えるできごと」です。過去のできごと「かつての現在」に起こったできごとであり、記憶にある限りはこれまた「見えるできごと」です。見えるからこそ回想することも、

詳細に語ることもできるわけです。できごとが「見える」ものなら、それらが属する時間領域もまた「見える領域」であり、したがってそれは物理的に見える空間領域すなわち〈まえ〉に存在するものと見立てられます。対照的に、未来のできごとは未知の存在であり、「見えないできごと」です。見えないできごとが属する未来という時間領域もまた「見えない領域」であり、したがってそれは物理的に見えない空間領域すなわち〈後ろ〉に存在するものと見立てられます。よって、見える現在と過去は“前”で表現され、見えない未来は“后”で表現されるということです。



### 二分法へのこだわり

中国語は文の構成法や否定詞のつかい分けなどから、とかく、現在と過去をひとくりにし、未来と対立的に捉えるという、〈現在&過去〉vs. 〈未来〉、という二分法に強くこだわる言語であることがうかがえます。ここで取りあげた時間詞に関わる“前”と“后”の対立もそのひとつです。人間だれしもこだわりがあるように、言語にもそれぞれの個性があり、こだわりどころが異なります。言語ごとのこだわりの違いを見つける、これもまた言語研究の醍醐味のひとつです。



## 安藤順一

開発コンサルタント

## 心のつかい方

私はいま、1年の約1/3を発展途上国と呼ばれる国々で過ごしています。ときに東南アジア、ときに中南米と、さまざまな言語・宗教・食事などを目の当たりにしながら、その国の開発・発展に寄与することを目的とした日本政府のプロジェクト実施に携わっています。

ある日は外国の政府高官と、またある日は農村の子どもたちと、そして国内では政府関係者や民間企業のお客様、上司に部下など、たくさんの人たちと仕事をしています。このような「国際協力」の仕事をしている私にとって、ラボの「国際交流」やそのほかの活動で得たことがいまでも心の大きな糧となっています。

以前、支援国の政府高官や民間企業のCEOなど約200名が集まったセミナーに



留学した高校の卒業式

において、英語での司会進行を務めたことがありました。関係者の方々に高く評価していただき、ラボで得た「外国語で伝える力」や「人前でしっかりと話す力」が生きたと実感しました。また、ある教育分野の案件でいなかの子どもたちへのアンケートをとらないといけなくなったとき、より多くの子どもたちに協力してもらえるよう「スーツで学校に行くのはやめよう」「最初にゲームをして我々（プロジェクト団員の日本人）のことを知ってもらおう」などの提案をしてよい成果を得られたのも、幼い頃からラボ特有の縦長のコミュニティにおいて、相手の立場になってなが最良かを想像する心のつかい方を覚えたおかげだと思えます。

ほかにも、ラボの国際交流では、さまざまな局面で「勇気」や「忍耐」などを学びました。中1の私にとって、ホームステイ中の毎日、自分のために予定を詰めつめてくれていたホストファミリーに「物語の素がたりを見てもらう時間がほしい」と英語で伝えるだけでもほんとうに勇気がいりました。

また、ラボ高校留学では勉強や人間関係など、日本では感じない「不自由」がたくさんあり、「何のためにここに来たのか」「なにをこの経験から得るべきなのか」を悩み、考えぬいた1年でした。しかしそんな経験をしたからこそ、ラボ修了後に参加した南米での青年海外協力隊員としての赴任中も「不自由」を感じず、そこにいる人たちや環境に感謝して「自分がどうあるべきか」と向きあうことができたのだと思います。

そして、その心のつかい方はいまでも同じです。人間関係でも仕事でも、なにかにぶつかったとき、相手の立場や考えを尊重すること、忍耐力をもって自分を見つめなおすこと、勇気をもって歩み寄り協調すること……。

まだまだ未熟者の私ですが、ラボの国際交流をきっかけに得たこのスキルは、今後の私の人生を引き続き豊かにし続けてくれるのだと思っています。

あんどろ じゅんいち=株式会社日本開発サービス  
(大阪府・辻本裕子パーティOB)

## Information

### 国際友好親善事業

#### ■アメリカ4Hカンファレンス

10月8日に、ラボと国際交流を行なっている4Hクラブのコーディネーターのオンライン研修会があり、ラボ・チューター代表として三井麻実氏が参加しました。そこで、東京都のラボ三井パーティと大阪府のラボ篠原パーティの会員やOGからの、国際交流への思いや期待を語るメッセージ動画が上映され、好評を博しました。

#### ■海外からの青少年受入れプログラム

今冬のオーストラリア、ニュージーランド、中国からの受入れは中止となりました。

#### ■2021年「ラボ国際交流のつどい」

日程：2021年3月20日(土)祝、21日(日)

関東甲信越地域

※ほか全国各地で3～6月に実施予定

#### ■理事・評議員会

2021年3月中旬～下旬の予定

### 東京言語研究所

#### ■公開講座

日程：2021年2月27日(土)

時間：14:00-17:00

講師：ロバート・ゲラー（東京大学名誉教授）

演題：地震・英語・研究倫理（仮）

—その建前と本音（※使用言語は日本語）

#### ■集中講義

日程：2021年3月27日(土)、28日(日)

講師：平岩 健（明治学院大学教授）

演題：不定語の統語メカニズム—分解と認可

#### ■理論言語学講座

2021年5月開講

（オンライン講義…一部対面講義予定）

要項：2021年2月上旬、ウェブサイトに掲載予定

申込開始：3月26日(金)～

### ラボ日本語教育研修所

#### ■外国人のための日本語教育

日程：2021年1月13日(土)～3月19日(金)

受講者：ベトナム、韓国、モンゴル、中国、タジキスタン、アゼルバイジャン、ロシア、シリア、モロッコからの留学生

#### ■第16回全養協日本語教師検定

試験日：2021年2月21日(日)

内容：日本語教師およびその志望者を対象とした、日本語教育にかかわる実践的知識および能力を測る試験

主催：一般社団法人全国日本語教師養成協議会

会場：全国各地